

## 学校現場から 考える

地域に悲観させたま  
卒業させたくない

まず、先生方の地域の生徒の志望の特徴を教えてください。

**杉山** 高知県の公立高校の生徒は、地元志向が強いと思います。本校では、生徒の約半数が中・四国の国公立大志望です。人気があるのは高知にも近畿にも近い広島大、岡山大です。出来れば地元で暮らしていきたいと思っっている生徒は多いと思いますが、他の地域と同様に、就職先は豊富ではないのが現状です。

**松井** 北海道の生徒が道外に出るのであれば、東北よりも空路が充実している関東の方が便利です。だから

# 生徒との真摯な対話が 地域を創る新しい価値観を育てる

主体的に地域で生きることを選び、地域を創っていくことが出来る人材を育てるためには、どのような指導をしていけばよいのか。グローバル化する社会の中での地域のあり方や、学び方の可能性の広がりやを踏まえ、高校教育の次代を担う世代である2人が語る。



「誇り、愛着を  
育むためにもっと  
地域のことを教えたい」

生徒は、進学するなら道内か関東という意識を持っています。ただ、道内は今景気が冷え込み、就職先が少ないことを生徒は知っています。そうしたことと暮らして生まれ育った町にずっと暮らしていけると考えている生徒は少ないでしょう。

**杉山** 東京や大阪に比べれば就職先は少ないですが、地方にも頑張っている企業、世界に誇れる企業はあります。でも、生徒はそうした事実をほとんど知りません。私も、生徒と

大学について話すことはたくさんありますが、将来どんな会社に勤め、どこで生活したいと考えているかまで話が及ぶことはあまりありません。もちろん、そうしたことを本気で考えるのは大学生になってからですし、それぞれの価値観で生き方や生きる場所を決めてほしいと思いますが、少なくとも地域に悲観したまま卒業させたくないと考えていることがあります。自分の地域でも、誇りを持って働いている人がたくさんいる

### 高知県立高知追手前高校

- ◎設立 1878 (明治11)年
- ◎形態 全日制／普通科／共学
- ◎生徒数 1学年約280人
- ◎12年度入試合格実績 (現浪計) 国公立大は、東京大、大阪大、岡山大、香川大、愛媛大、高知大などに146人が合格。私立大は、立命館大、関西大、近畿大、関西学院大、松山大などに265人が合格。
- ◎住所 〒780-0842 高知県高知市追手筋2-2-10
- ◎電話 088-873-6141
- ◎Web Site <http://www.kochinet.ed.jp/otemae-h/>

### 北海道旭川東高校

- ◎設立 1903 (明治36)年
- ◎形態 全日制・定時制／普通科／共学
- ◎生徒数 1学年約280人
- ◎12年度入試合格実績 (現浪計) 国公立大は、旭川医大、北海道大、北海道教育大、東北大、東京大などに178人が合格。私立大は、北海道医療大、中央大、東京理大、明治大、早稲田大などに327人が合格。
- ◎住所 〒070-0036 北海道旭川市6条通11丁目
- ◎電話 0166-23-2855
- ◎Web Site <http://www.asahikawahigashi-h.ed.jp/>

高知県立高知追手前高校

## 杉山太夏子

すぎやま・たかこ

教職歴15年。数学科。高知県立宿毛高校、高知県立橋原高校を経て、高知県立高知追手前高校へ。同校に赴任して9年目。2学年担任。企画研修部所属。



北海道旭川東高校

## 松井恵一

まつい・けいいち

教職歴15年。公民科。北海道旭川東高校を経て、北海道旭川東高校へ。同校に赴任して9年目。進路指導副部長。

ことを教えることで、地域も選択肢の1つになると思っています。

### 教師の生徒へのかかわりが 地域への愛情を育てる

**松井** 先日、就職1年目の卒業生が本校を訪ねてきました。その子は、自分の視野を広げたいと東京の大学を選んだのですが、東京で多くの時間を過ごすにつれて、北海道に戻りたいと思うようになったそうです。私が「でも、北海道には何もないよ」と冗談めかして言うと、「東京にはない豊かな自然や生活がある」と言うのです。地域の魅力を堂々と語る教え子がとても誇らしく思えて、別れ際、「今日は君に勉強させてもらった」と礼を言いました。

**杉山** 外から見た方が、そこにどんな価値があるかが分かるのですね。自分にとって当たり前のことほど、その価値にはなかなか気が付かない。だからこそ、一度外に出てみる必要があるのでしょうか。

**松井** その教え子も、高校生の頃は



### 「母校で頑張った 思い出をつくること」が 地域への愛着につながる

北海道には何もないと思っていたし、人間関係のしがらみもイヤだったけれど、外に出てみるとむしろ東京は空虚に感じられて、北海道の素晴らしさが分かったと言っていました。ただ、魅力に気が付いたけれど、自分が北海道に帰って来て何をすればいいのか、何が出来ることが分からないと言っています。今は、その方法を見付けようとしていて、雇用が少ないのなら自分で起業することも視野に入れていそうです。山口寛さん（P13に登場）のような町づくりの専門家の下で勉強することも考えていると言っていました。

**杉山** 自分が生きていくのは地域なのか東京なのか、それとも海外なのかを決めるのは、大学に入っているいる価値観に出会ってからです。地域を担う人材の育成という観

点から高校で出来ることがあるとすれば、それは地域への愛着を育む土壌をつくることだと思います。地域のことを知ることで、地域を誇りに思う気持ちをゆつくりと育ててもらいたい。岡本尚也さん（P8に登場）は、海外で生活するようになって鹿児島良さが分かったということですが、これも岡本さんが鹿児島のことをよく知っていたからでしょう。

**松井** 確かに地域に愛着を持たなければ、いくら地域の人々が「戻って来てほしい」と願っても、若者は外に出て行ったままです。地域への愛着を育むために、教師が出来ること……それは、生徒に頑張った思い出をつくらせることではないかと思えます。生徒は、自分が頑張った場所だから、地域に戻ってくる。だとしたら、教師が授業や部活動で一

特集

「主体性」の育成

②

地域に生きる人材を育てる



## 「学び続ける力、 知識を組み合わせる力を 授業の中で養っていききたい」

生懸命生徒にかかわることが、地域への愛着を育むことにつながるはず

です。  
**杉山** 本当にそうですね。東京大に現役合格した教え子が「追手前あつての今の自分だから、追手前のためには何でもします」と話してくれたことがあります。学校、地域に育てられたという感謝の気持ちがあるから、地域に貢献しようと思うのでしょう。だから私たちが生徒に一生懸命にかかわることが、私たちの出来る地域貢献だという気がします。

### 共感する力を高めて 社会貢献意識を具体化する

**松井** 最近の生徒に感じるの、一見、積極性に乏しいけれど、実は社会貢献の意識を内に秘めているという事です。本校に勤務して今年で9年目ですが、赴任当初に比べ、将

来の大きな夢を語る生徒は減りました。「最近の生徒は自己主張しなくなりましね」と先輩の先生と話すこともありません。でも、面談などでじっくり話していくと、少しずつ自分の思いを語り始めるのです。表面的にはおとなしいけれど、内面には「社会のために何かしたい」という思いを持っているのではないかと。ただ、自分に何ができるのか、自分の気持ちやどんな言葉で表せばよいのか分からないのではないかと思うようになりました。

**杉山** 進路志望調査などで「人の役に立ちたい」といった思いを書く生徒は多いですね。思いやりがあつて、クラスの中でも譲り合つたり、助け合つたりして、身近な人への気配りはとてもよく出来ます。でも、離れた場所にいる人への共感や、それを源とする行動力はもっと強く持たせたいと感じます。例えば、東日

本大震災の被災者の方の苦労は頭では理解できても、被災者と今の自分を結び付けて、自分の行動まで考えてみるのがなかなか出来ません。社会の役に立ちたいという思いを秘めた生徒が、自分には何が出来たのかをほとんど自分に問いつける機会をつくることも、私たち教師の役割ではないでしょうか。だから私は、何とかして生徒を東北の被災地に連れて行きたいと思っています。現地に立ち、被災者の方の思いに強く共感することで、社会貢献への思いをどう具現化すればよいのかが見えてくるのではないかと思うのです。

——**吉川真嗣さん**(P10に登場)は、「人のためだったからこそ頑張れた」と貢献の意識が大きな行動力となったと強調しています。

**松井** 生徒に社会貢献の思いを具現化する方向性が見えれば、強固な進路意識が醸成されます。本校は、地域医療を支える人材を育てる医進類型指定校に認定されていることもあり、「医師が不足している北海道に貢献するため、医学部を目指す」という生徒がとて増えました。

**杉山** 医師や教師などは社会への貢

献の仕方が分かりやすいですが、その他の仕事もそれぞれの社会貢献を行っていることが生徒にはイメージしにくいようです。例えば、「総合的な学習の時間」などで職業体験を行う際に、興味を持っている職種ではなく、あえてよく知らない職種を体験させて、社会の中でどう役立っているのかを気付かせるような取り組みが必要なのかもしれません。自分に合った仕事を見付けるための体験ではなく、職業への視野を広げて、働く喜びとは何かを深く考える





ための体験です。

## 問い掛け続けることで 新しい価値観を育てる

**松井** 地域への貢献は日本、そして世界に、海外での貢献は日本、そして地域につながることをイメージできる力も生徒に持たせたいです。今は海外で働いていて、地域からは離れていたとしても、それでも地域とつながることは出来る。山口さんは仲間の言葉があったから、それを想像することが出来たのでしょうか。

**杉山** 変化の激しい時代においては、地域で働くにしても、世界で働くにしても、一度選んだからといってそれはずっと固定されるものではありません。世界と地域、両方の状況を知っておくことが、これからの生徒たちには不可欠だと思います。**松井** 生徒に求められるのは、これからどんな時代になっても、またどんな国に行っても通じる普遍的な力だと思えます。普遍的な力とは、「学び続ける力」であり、「蓄えた

知識を組み合わせる力」だと思えます。それがあって初めて新しい価値を生み出せる。だから日々の授業でも、知識を蓄えただけで終わりではないし、学びは一生続くということを生徒に訴えたいです。

——吉川さん、山口さんは、「無価値に見えるものから価値を見いだす力」や「新しい価値をつくる力」が地域には必要だと語っています。

**松井** 地域で生きることが生徒にとって消極的な選択肢ではなく、主体的に選ぶ価値のある場所になるためには、新しい価値をつくり出す力が必要です。そのためにも、私たちは生徒にもその見方を変えるような問い掛けをしていきたいと思っています。少子高齢化という現象を知っているだけでなく、それが自分たちの地域ではどんな意味を持つのか、



「社会が変化する中、  
生徒と対話し続ける力を  
持った教師でありたい」

少子高齢化の状況を変えるためにはどんな方策が考えられるのか、あるいは少子高齢化は本当に悲観すべきことなのか……など、多様な見方、分析が出来る力も普遍的な力だと思っています。「君はどう考える？」という問い掛けを大切にして、生徒からも「先生はどう思いますか？」という言葉を引き出していきたいです。

**杉山** 授業を通じた生徒と教師の対話ですね。それを実現するために、教師自身が視野を広げ、異なる価値観を受け入れる姿勢を持つべきですね。もつと社会のことを勉強しながら、同時に岡本さんが立ち上げられた団体のような外部の力も積極的に借りていきたいと思っています。グローバル化して異なる価値観に触れやすくなった社会だからこそ、教師の工夫次第で新たな見方を身に付け

させやすくなるはずだと思います。

**松井** 先日、全国の同世代の高校の先生方とお話しする機会があり、「生徒の多様性を否定せずに受け止めてみよう」という話になりました。それを心掛けるようになると、実は生徒はいろいろなことを考えていることが分かるようになったのです。もしかすると私は、これまでは生徒に自分の考えを一方的に伝えていたのかもしれない。生徒に対する私自身の見方を、もつと深めていかなければいけないと実感しました。

**杉山** 社会が大きく変化する中、新しい生き方を選び、挑戦しようとする生徒にどんなアドバイスが出来るのか、私たちの力量が厳しく問われているのだと思います。これまでの価値観では測れない道を選ぶようにする生徒の言葉に耳を傾け、生徒が見いだした価値と真摯に向き合う態度が、ますます大切になるはずです。教師が生徒の心の声と向き合い、対話を重ねていくことが、生徒の主体性を育むことになるのではないかと思います。